

~ 13
3397
4



13
3397
4

又本新

國事物語 四の巻



東都芍薬亭主人著

夏木立

良馬木下宗盛は走て干戈と興話

頼政ハ平家の一族旭の昇月の盈が如くあるよひまきうて
保元の戦は功あり。平治の乱は朝敵とあつらんやおそい
血属といまきもあれて平家よあさぐいしどははる恩賞
よものづらうど。年久しく大内守護よてありれど昇殿
よぶよあさるれどじで鶴と射る功ふるうて仙洞の昇殿
とあり又

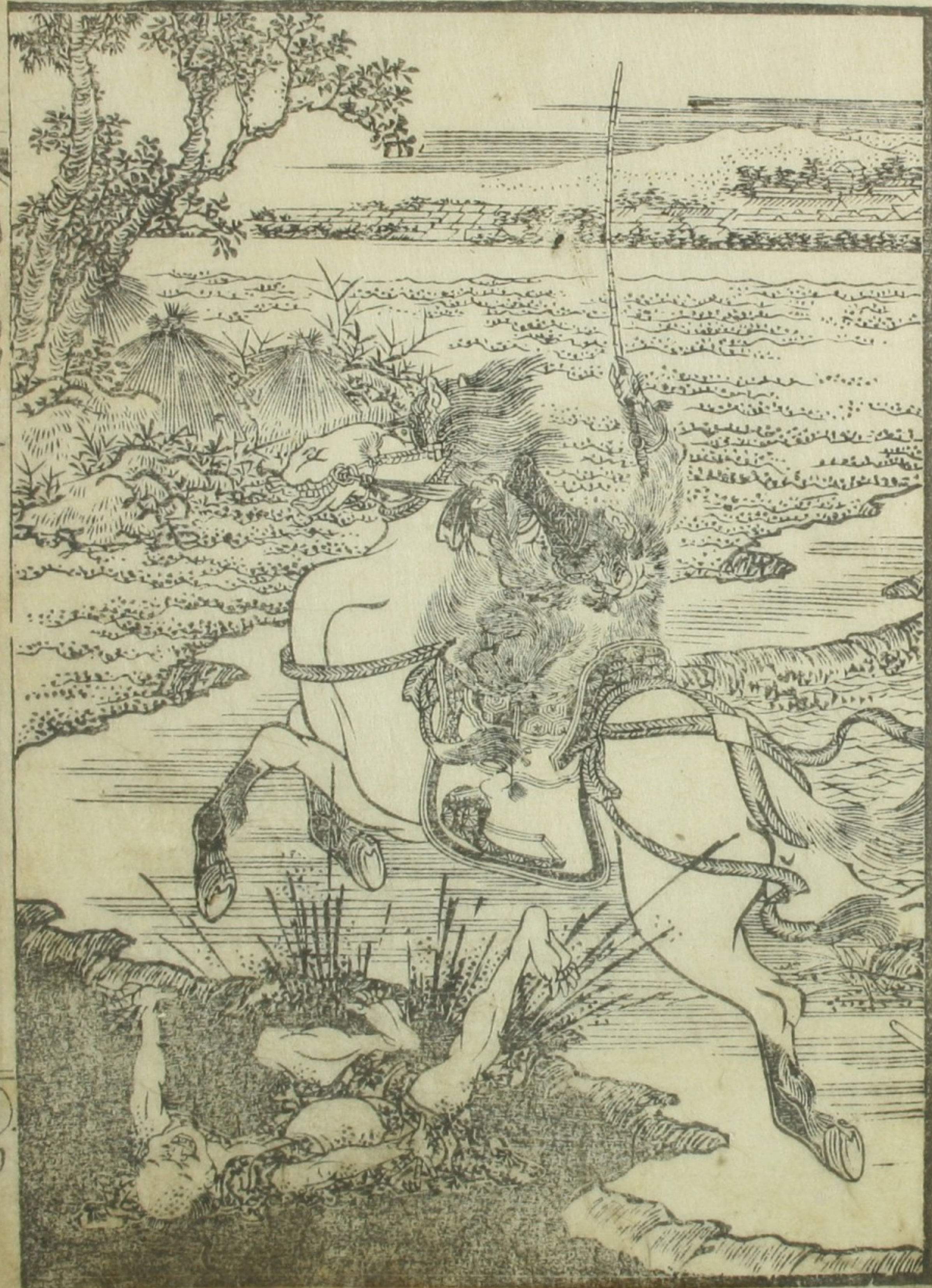
國事物語卷四

人不知大内山の山守ハ木がられての月で見らり邪
いとあつぬ
 とらるる歌の徳ふらりて四位よつのかみに叙せられて内の昇殿のぼりかみハ
 されりりいふ。齡いふやうのふき七十三といふ年治承二年ちまうに平相
こくき國清盛公の執奏とらふらりて三位みつのかみに叙せられしとせよハ
 のづまのづま便たすかきまハ本もとのゆく推おしせひろひてせと渡りぬ
 とらみとらみするふらりてこといふとやせどいりて歌うたもむ度ほどは
 位ゐのまむむべき其以人の口號くちがひハ頼政の家いえに過へする物もの七しち一いち
あは歌道うたのちみち二ふたは渡辺競わたべのきよ三さんは木下鹿毛きのしたのしかげ四よは武庫むこ
まは伶人面まいたんのめん七しちは婆娑羅ばさら不足ふそくある物もの三さんつ一いちは位ゐより所領しよるう稱なづ譽え
さいふより幸福さいふ風流ふうりゆうかして下戸げこといふとやせり其その名な高たかくして

沈倫ちんりん久ひさきとのおひとらるる平家ハ原肩はらかたと双ふたなる人ひと
 ありしと俄いつぱに登庸とんぐられて時勢ときせい君臣きんしんの如ごとくあると不快ふくわいおも
 きしりど平相へいさう國梁冀董卓こくりやうきとうたくが威權いけん既すでにまきハまらりて亡なぶぶま
き兆きざしハええなならるる不成ふせと知りて不成ふせとなりて為人かたハもああららば
む胸むねおしとらりてああららの年としでぞささじじらるるささもああややめ
 のみハ宮みやづのの時ときとハみりりり頼政たのまさは嫁よめてよりハはららづづの
 孫まごと深く仲政なかつまさ笛竹ふえたけの夫妻めづととああららるる國歌くにうたと詠よめし筆ふでと弄あそ
みるみハかくて酒さけと過へし媚こいとささめ容ゆるみハ日ひおそおひて美うつくしく心こころハ年とし
とと逐おて倭やまとままららるる男おとこ女むすめ中のちゅうらら平家へいけの勢盛せいせいあらと孫まごははく
 おひりるよや頼政たのまさは軍いくさおにして討うちめとささららるる年としのれ

といふる大なる婦女の初るべきものよあつたとしてとりあへぬ
 又あやめの家と頼政は賜ひてより廿年をくりもたぬと容
 貌おとろくもどりやつたので世は頼政が過するのの殺いと
 つふえしつりと羨めど頼政はひそり小夏姫が三度若き
 たる流亞よと不祥の婦人とおおひかぎり自いごめいたる上
 よ上皇より賜ひし女房あはれ追ひやるべきものもさう
 あり今ハ賣弓の翁夫婦もさまりてくるべきかまきす外
 よハ疎くもどめてなされり治承三年は内大臣重盛公
 薨させあひ弟大納言宗盛卿威權で恣あつてつと平家
 と人のあくむやうよどあり也まきる其は仲綱が鍾愛の馬

本の下鹿毛といふ良馬ありこれハ陸奥そごらの駒
 て押領使藤原秀衡人よこころんりせりこくせりこころ
 秀衡立野黒とて天下は雙かき馬と持たれば馬主
 宮城野の本の下りも名は高く立野の駒といふまことん
 とよこころやうりぬバ其後ハ不乞ありしとやぐ都おひきのが
 又仲綱よハよこころ仲綱鍾愛してのりあらくよ主ハ皇
 城の美男馬ハ東奥の駿足赤繩蹄は繫まて千里の遠き
 来る千載の奇遇として人奉て羨らる宗盛卿聞つけ
 使として乞うる一日は五六度よ及びしうど仲綱
 するうげとばいぬくゆやるべきやと聞えてよとらる



國字鳥羽卷四

四



玉環が天
仲綱が馬と
盗く宗盛
卿よと

國字鳥羽卷四

深く仲綱と悪針むりの過失もめを扱わざりし
かてうきあえせんめと眼で見張て行れり。時、仲綱が
失行せしやとて郎ちく付せし。謀人走り来りて仲
綱が命せりけし。本の下鹿毛唯今参り候といふまことり
と立出えぬあまひとらの大なる猿改よ立烏帽子戴き玉
繩ひらうととくとのやませし。口よつきたる男も鞍置
たるもあええざれどまどとハ聞でも灼然逸物くられむ
宗盛卿歡てやがて厩に繫せ猿菓子をよへんとさるふ
いづち行らん影さし。勞めりて賞せり。あがる猿中の君
子といふれり。バ物盗て人よよある君子やハあるとて聞

人爪をまきして嘲笑ひたり。以後ハ本の下鹿毛といふぞ
の仲綱は鞍をけ。仲綱口こころハうてたどいといふぞ
仲綱は侍てあまよてあま馬と權威よて奪るさるあ
と刺世の笑ひざとあまんころやさうと祢と憤まらるを
父頼政聞て何するのあまきとおひあむづりて平家の輩如
斯の志れぞと為よこそあれ。さうバ命生て何りせん改まる
めて佛の道よ入りし。うど殺生戒ハ多田新發意もくけし
あはざりき。いので平家榮花の夢と破るさあ。いぞハ源氏
雌伏の睡と覺せんといひ日よりぞ平家と伐べき。籌策
とめざらる。あまハ治承四年二月安徳帝位よ即あ

平家の跋扈日來二百倍いやくたひのめれば頼政胸むねに居ゐり祿ろくて或夜
 高倉宮たかくらみや以仁親王の御所ごしょにまゐりてそのついでよいもれるハ
 君ハ神武帝かむむていより七十八代しちじゅうはちたうだいのあつてあひ一院いちいん
 新院しんいん高倉たかくらの御兄ごあによつ皇儲くわうきよよも之をせあひ位いよも即すなはちあつて
 故建春門院こけんしゆんもんいんの由よしを祿ろくこはりて今年ことし卅さんじゅうのに齡いまで
 宮みやあつておしあつてハいんじとハおぼしめりとや平家へいけと
 不ふろぶして一院いちいんの鳥羽殿とりばのよおこられて渡わたせあつ幽憤ゆうふんと
 やらち君きみも祿ろくと踐ついであつて一竊ひそ承うけるふ今いま上かみ安徳やすとく女體にょたいふはし
 ちよと世よハ皇子みこと披露ひろうして位いよも即すなはち奉ほうり平家外戚へいけがいせきの威い
 とまちと遅おそせんと謀くわくとと人ひととバ欺おそべいくと伊勢いせ

石清水宗廟いそしみづのみやの神かみと欺おそめとまきおがりしをあつてあつて
 下くだしめりては兼かねて平家の所ところ為なるに齒はと切源氏きげんしの族しゆ
 長藏人ちやうざうじん光重みつしげ冠かん者しや光義みつぎ兄弟あにがた熊野くまのハ故ゆゑ為なるに義ぎが季子きこ子こ十
 郎らう義盛ぎせい撰津せんづハ多田た次郎じらう朝實あさみ手島てじま冠かん者しや高頼たかより太田お木
 郎らう頼基よりもと河内かゐハ石川いしかわ判官はんくわん代義よ兼大和やまとハ宇野うの太郎たうらう有治ありぢ
 次郎じらう清治きよぢ三郎さんらう業治なりぢ四郎しじらう義治ぎぢ近江きんけハ山木やまき柏木かしわぎ錦織にしんぢ尾張おぢ
 子こハ山田やまだ河辺かべ浦野うらの甲斐かいハ難たがひ信濃しんぬハ何某なにがしならむとらむ
 といといとのめげは聞きゆるふ宮みやもいはるいとのめきと



長兵衛信連
高倉の宮と
諫めて人相と
論を



おのひとづついひあひて頓の肉もかろうくるがけりて少
納言惟長とつる相人ハ宮と相とてまつりて位は即せあ
相のりせせおのひとづついひあひてあふたとやうなるといふ
頼政のうく勸まのうせぬればさてハ伊勢石清水の神慮を
らんとて頼政がそくいふまをせぬいりて先新宮の十郎
義盛と徴て藏人ハ補一行家と名改て令旨の市使ハ東
國ハこそ下されけり宮ハあはしくつと奉る兵衛尉長谷
部信連はるせ洩聞て宮のゆあよ出て諫るハハ度の内企
頼政がはるめ奉るふらるこいども實ハ惟長が言と信
あふあづい凡相と言る和漢よりて来るる久しとい

ども其原せおきハむる多異相の者の終身の禍福と
考索とて相と論の摸範とせしものよて相小よりて禍福
とハ摸範定りて後のことごめらん、されバ虞帝項王ともハ
重瞳のりて興亡ひとくく、亞夫鄧通ともハ縦理口ハ
て皆餓死と可疑り可信り、英布が刑せられて後王とるべきと
説て王とありて後戮せらるべきと不言ハ英布が不幸ある
相士のあやまらる、鬼貌藍色ある面長身短ある既貴あり
鳳姿玉質ある海口大耳ある尚賤あり、荀卿非相の篇と著
て之相形不如論心論心不如擇術形不勝心心不勝術形相
雖惡而心術善無害為君子形相雖善而心術惡不害為小人

とこそうけありぬれ相士の言いつらありてい手と拱
 徳と積行と正して時のつらと待あふべし時勢と察
 強弱とくうりありば無謀の軍でおうてことごとく招
 あふべきさるうハ相は應じて帝王とあるハあらん相とあ
 て王位とあつらひあふあふべきさるともおをえん宮の
 まふ汝刀法射術よの長し膂力ありて口文のきつめのと
 おゆい居しよいつのあふより文学よ心とあてりむりの
 議論とのあつらひあふあふれ其言一と聞て二と不知
 麓より花の咲をむるやあつて奥山より黄葉の落ち
 むるや不知よやとらふべき諺よ不言や有心無相相逐心生

有相死心相隨心滅と丸帝王の相ありとも信天翁鳥の嘴と
 張て魚の来るや待がやくわうバ相心は隨て滅ぞんや信
 連の君不宣や有心無相相逐心生と竊は濟世安民の用心
 今一院後白河帝政とこころありあども玄宗蜀よ奔のこころいよ
 あらば平族權と恣よされど祿山位と篡の劇よあらば
 君肅宗のふりで行ひあんとおゆいあふとも時勢異あつて
 兄あふべし宮のこころ承統のこころあつてあり世系と文
 徳とく世系とくを新院高倉帝の兄と徳つとけしとくとも
 幼稚の言仁安徳帝よハまごころあん命とせんものハとまれうくまふれ

丸が命ハ父帝よとてまつぬと夢入れあふゆけとひ露
をりりもええざれば信連もせんさあゆゆ子と退き命とし
こへさみかきと祿ぶゆのとおもさせあふ最口せしむおこるバ
迎も市運ひりりさき軍よゆじ。おのみまふ國死しりく
雄々敷心ともおとせとてまつるをやとひとり言しりるが果
し宮のおらさせあふ時よ一人市所よあきささり花々敷
あさみひしん名と後代よ傳くりり

無花果

高倉宮相士の言と信て光明山よ亡話
源三位埋木の歌と誦て平等院よ死話

高倉の宮のゆらんとてとやくゆゆりて治承四年五月十五日

宮と收奉て土佐の國一流さんと官軍の寄と聞て宮と
三井寺へ奔し。頼政ハ近衛河原の邸へ火とりけて嫡子
仲綱二男源太夫判官兼綱六条藏人仲家其子藏人仲光
渡辺黨よハ播磨の二郎者源太連右馬允與長七唱至授
覚列配早清近わむ三百餘騎ゆゆり参らゆり其夜
渡辺競宗盛卿ととをりて南鎌といる馬よ打のり
馳来ゆバ仲綱ゆらこひて本の下鹿毛の代とて尾髪切ゆ
平宗盛入道と焼鉄ゆゆぞ追放しりる。三井寺の衆
ハ俄よ宮の入しゆゆゆハ愕て叡山南都ハ牒状と贈味
ゆゆゆゆゆゆハ叡山ハ志ささる南都ハ志ささる奉



倉の
宮の
あつれて
守治橋の戦



守治橋の戦



道程遠し。頼政おもむけけるハ三井寺の衆徒と合て二
千五百騎は不足勢よていへ平家の大軍よめりきさら
を南都へ奔させめとて老僧をよハ残し置其勢一千五百
騎をりり三井寺と打互るふ宮ハ菟道まへのりて六度
まぐ内落馬のり。本夜より寐させぬ故とて宇治橋
の中間三間引こゆ平等院よ入れ奉る志むくく憩せまぬ
らせり六波羅よハもとや南都へ奔させめよ追りて討
奉るこん左兵衛督知盛頭中将重衡薩摩守忠度と大
將軍とて上総守忠清其子上総太郎判官忠綱飛彈守
景家其子飛彈太郎判官景高高橋判官長綱河内判官秀

國武藏三郎左衛門有國越中次郎兵衛尉盛次上総五郎兵衛
尉忠光悪七兵衛尉景清とてとて其勢二万八千余騎
小幡山打越て宇治橋の詰よぞ押あくる宮の内方ハ大矢
の俊長五智院の但馬渡辺黨省連授の射くる矢ぞ楯もたぬ
らむ甲もさしり筒井の淨妙一末法師が驍勇矢切の但馬が
早業敵味方の眼と驚し橋の上の戦烈しつれハ川と渡さん
とさるふ折ふし梅雨の頃よて水くさ塔り涉べくもあらず
淀一口よやむるべき又河内路へやまりるべきと議論まら
ある処ハ下野國の任人田原又太郎忠綱日未信仰ま竹生
島辨戈天女と遙よ拜し川の浅瀬と知せめくと深く

祈念して眼をひらき見ると、（さ）バ叢の中より一（い）の小蛇（さ）はらり
 と出まらり。やがて川は浸り浪をきりて、まぎやくと忠綱を
 くえとめて馬をさりと乗り入れなぐり十里はゆかりと
 あり大音のげて坂東武者のあつひ敵をみふりけ川を隔
 ちる軍は淵瀬きららぬやめ。田原又太郎忠綱生年拾七
 宇治川の先駈をやつけや人々を小蛇の渉へのりり
 白浪蹴立ておしりりりり諸軍これよづきて乗入れ
 難く向の岸は駈あがれば二千は足らぬ宮方二萬は余り
 軍ふたどあつるべき渡辺黨をまじめて太夫判官兼綱
 六条藏人仲家藏人太郎仲光も陣没しり。頼政入道ハ

弓手の膝みと射を重創あれば平等院の門内へ退き例
 の鼻比の敷革は尻打ちけ創口を結ひ宮を具へ奉り
 南都の方へ奔るとまらふ。こはいりよあつる革は膠を
 つけかく衣も醫もまらつきて立べくもあつたをこハ
 くらじし七十のあればとてうむりの創は足腰立ぬ根や
 めると心のつてとせんさく宮を先へ奔り奉り腰一文
 字は搔切て

埋木の花咲くもかくりふこのあつてぞあつたを
 ろれと最期の辞として行年七十五をまて芝の上の露
 消ぬ仲綱もさんぐも戦て重創あつて負ひ平等院の釣

殿よて自殺し宮も光明山の麓よて討きぬらん世よハ
 頼政老耄てしかきり企て宮とすし一族所從皆亡
 び余殃三井寺南都ふる鶴の灵のたよりあかき
 ついでつりつりされど平家既よ亡ぶべき機と見え平
 氏と滅嚆矢ゆて陳陟がさひあべし子の成と不成
 とハ人力の及ぶる処之誰う知んけ一季後末右幕下頼朝
 卿天下の權と執あふ創業の礎あふんとハ抑け平等院と
 するハ宇治橋の南ふりて始ハ河原左大臣融公の別莊ありて
 其後陽成帝け地よ行宮と建あひて宇治院と号ましり
 六条左大臣雅信公の所領とあり長徳四年御堂關白此地と

得て別莊と遊覽の地とよ永承七年宇治關白頼通
 公寺とありて平等院と稱し法華三昧と修せしむ
 佛殿ハ鳳凰とよ左右の高擗田廊と両翼とし後の
 廊と尾とよ棟の上よ雌雄の鳳凰あり金銅とて造る風
 よ志とて舞ふ故ハ鳳凰堂といふ本尊阿彌陀佛丈六
 の座像堂内長押よ北五菩薩の像あり四壁ありび三方の
 唐戸よ繪師の長者為成浄土九品の相と画く上よ色紙形
 の中納言俊房卿觀經の文と書天盖瓔珞七宝と鐫み
 麗莊嚴他よ異之今少宮方の軍強りりせば兵火の為
 焼るべきと戦ふくくて災のおよぶるりけ寺の洪福と



五月の螢
 乃と照して
 細雅丸と助く

鳥の音不田



月夜夜半言不田

ついでに今尚駒繫松甲拭松扇の芝を頼政の余波
ありてさるる懐旧の涙とさぐわうならとぞわらわら
鬪螢のさるるさるるよひ傳れど普く人のありさるる
あれはさるるさるるさるる

霜置栢

廣直乱と避て播州に隠る話
鶴太獵は従て蛇妖を殺る話

渡辺競猪隼太廣直ハ頼政三井寺と立退る夜ひそろお
招きていさるる軍機不密してさく洩る宮の内運
ひさるるべきよあさるる昔子二人死といさるる易とて生
と全さるるの難よえさるる程嬰杵臼とて行ひ平家の

耳目とさるる趙氏の祀と残しとれよとてゆめのお
仲綱が室笛竹仲綱が男綱稚丸とて五方ありと三人と託
せられ獅子王の劔家譜古文書をとりとれよとておむる
あきて人さるるいざあひ立別るよあやも笛竹綱稚ハ世の
名残ともさるるざれどさるるさるるさるるさるるさるる
ありしものとおひさるるけぬ世の乱よ遇て父子夫婦ひさるる
る悲よ涙せきあはるる男ハ世のさるるさるるさるるさるる
ながるる頼政仲綱ハこれぞ面と見えしえさるる終とるひさるる
らせバ女心の歎よもいさるるさるるて影見えゆさるるのびのりさるる
てぞんおくらるる丹波五箇の庄若狭の宮川又東國

よも領所ゆれど世と志のよも便よりとどと妻の群萩が
 故郷播磨の國小隠きんと先妻の群萩よ三兒とて
 西山村よつりして家居よりつらさを草蒲笛竹綱維
 とバ揚州兵庫の築島よとるて志のよも置ぬ競集
 太よむらいてりよ三位殿の所従多中ふ足下と僕と選
 出されて死の易とさる生の難よとるよ僕又其難中の
 易ふとるよ我兒小太郎と携て丹波よ潜居人足下難中
 の難よとるよ謀べし隼太よ僕三兒あり足下
 ハ唯一兒と三兒と全して一兒と殺さんやとるよ足下
 易よとるよ却美譽せふ彰き僕難て行て醜名史ふ

記さるべし競りよ君家の大厄よ羅後世の名とありし時小
 めうどるの宜よとるよ足下の三兒皆父よ肖てとる
 ふうめれど一兒も稚君よ代るべきなし僕が一兒病とるよ
 年齢容貌稚君よ鬢髻とる一兒と喪て吾祀絶とも他
 渡辺黨の兒孫榮る者かうらんや隼太掌と拍て笑ひて
 つの僕のやまゆり我兒我よ肖て醜く足下の兒足下よ
 肖て美し齋燕石と珠玉とのこのたぐひらんや後世
 の名ハ古人已一盃の酒ふども不換とつる僕酒と不嗜又
 一塊の餅ともおもハて競りよ今齒とあつて談笑と
 づき時よめりど父母もめり妻もめりハんや良しといふ

たるりんとて人々ふさぐれど告げ小太郎とともあひて出行
 たり。隼太ハ主人の先途を見せけんとして出立んとせし其
 夜より虐と病てさしも剛強廣直も人事でも不年三
 四日過て病少しおこさうなれば人々のさむむせも不聞
 ちひて立出んとせし時主の男おしとさめりふやう病の
 さりりよもあつぬらんとつししりど今ハやむさめて語
 まのさるるを宇治の軍破れて頼政君ハ父子とほ
 めふせしとあふ人々のハのさうめく戦死しあひぬ今ハ行
 めふともりいかるべしとて大に歎き大居よとさうと
 倒れし音小驚てあめりのお笛竹綱稚丸もたして出立同

と聞て今更さの發は如く語つぎさうさうとさうぬ
 袂濡まさうて。あせ知る雨のいらもせんとも見えざり
 たり。隼太が病やういへんハ昼ハ人めとさうさうり月
 闇き夜よ安とやつし兵庫の浦と立出る小群雲立ちと
 たり。細雨降えさうり行づきさのたどりささよさうりて
 歩もあれぬ人々と伴ひ綱稚丸と背小肩ひ雨衣炬火の
 まうけもかきまうさ立りさあけて木の下蔭お立やらうひ
 暗間待つ心のうらおも雨止むとていつまてうさふ居人
 夜の明ぬ程よ赤石すてハ行でうかぬめゆめと歎息して
 天うちかぎり不慮後の方と見えれば一團の陰火飛来る



一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

人の見えぬ魂消やーあんと声のげて雨横らぬや降
 まさりぬ笠よておめて覆せぬとらうらふ二歩や先よ
 おつると見えーが碎て千万の螢とあり四方へ散
 乱せしが又一所小聚り来て行べき道と照しけり笛竹
 人こむむひてこハ妾が日未念トまのくく石山寺の
 観世音の加護あべー雨ハともぬれぬぞ朧ももんころ
 らバサしも先へいろぎのけ螢と葉ふとくもる小菖蒲
 どとぐや猪隼太もさうらバとて立出ると螢ハ夜の曲直高
 低よささぐひ左おあびき右よ流れ或ハ高くのがり或ハ
 低く舞ひ心のりて導が如くあり小力と得ておひのくお

道よりぐり 雞鳴よ赤石ある笛竹が乳母のわくふたぐり
 つき濡まきさる衣わさぐりし 労とやとち夫より西山
 村よ伴ひ来て群萩ハ糸と繰り機と織り隼太ハ狩お出
 獲と鬻て日月でおうりぐり 隼太が三人の兒伯ハ鶴太
 とて十一支仲ハ鶴二して七支季ハ鶴三とて三支よぞあり
 ぐる斯号なるハ敵将と獲て兒よ号 鯉魚と獲て兒よ号
 古人名と命の余風とささひ 主人頼政鶴と射自鶴と刺
 て功勳せよりられかきと後世も傳んと志あるべし
 隼太がささりのありさなとていも外ハ杉垣結ひまじし
 衡門よ片扇の竹ののこ戸あり 家ハ茅よてふさきたるよ

障子とめて三間よぬぐえ 這入の方よ大の爐とひきき
 自夫婦三兒とをま中あるるあハ上よ一の架とまうけ 錦
 王の劔家譜文書とひとの相おとて居下の架ハ頼
 政入道命終よあせあひして 紀念ともえよくて心おろる
 僧の平等院より贈る鼻比の敷革と又ひとの相よ
 とさめて居 朝暮主君の在グかくめてわじくくハ夜の衣
 長櫃皮の籠やうののの置奥の間ハ菖蒲のお留竹の上
 細稚丸の在と定め 庭よ常磐木の多し植柴垣めぐ
 らし 仮山めぐつくり 垣間見はとも 容易ととめがごとく構へ
 留竹ハ群萩が妹細稚丸ハ甥と呼び自ハ原よりの獵へと

人の耳目とらうませど、あやめのおの上朧めきたるふ何と
 もいひわらん根めぐ奥のふるふの居置よ血暈のとごあて
 のおそれ為とて獅子王の劔とまきひりる 貴き宝ひら
 うぬ家よと崇や招くらんいづくの寺社よも奉ら
 ちやといわらんせ 隼太ハ細稚丸のおとさんハ家お取傳へ
 あま宝故めぐ外お出まるやあるとさうけがとむ 留竹ハ良
 ぎしころ夫の仲細が鼻比の妖ありし時よけ劔の灵あり
 ーとえおとむひそくは劔の形と紙よ撮り符符符符
 とさめて細稚丸が肌身とかごせむとせり一日隼太首子
 鶴太と誘て獵よ出し終日獲物めぐ心神勞きて松が

根は腰うちうけて眠ともめくまごころとたる小年紀二十
むらりの美人髪をくくさるまよさら眉のぐり憤る顔色
あるが韓衣と名告子小龍と雕る短剣でめきゆらて
今こそ旧怨むくゆる時まりぬと走り去る鶴太が襟が
扱て刺んとす鶴太が阿と叫ぶ声は驚てあつとせんは
弄ひ居る火繩おのづら動出て鶴太が喉おまといつさ
て既よ息絶んとするま隼太心のこころ山刀抜よりとる
火繩で截断し手裏くくひて鋒ふく項よ入りてあつとび
阿とさけびてるまきれぬ愕まといて衣抱まれど甲斐を
かき火繩とえハ蛇よてさつとつよまされて側よ死居

とり泣く死骸家よ負ひとつて其夜ひとつの墳の土と
なりて逆ある追福いとかきり又或夜宝物居置
中の間の架よ物音いりれば隼太起出く燭秉てえり
ぐさふ人の入るけをいもか翌日さるまも前夜
の物音ふりくくいと隈めめとむふあさうりハ
外よ失る物あり唯鼻比の入る透の紐やうたる板を
よひくまらるるハあ革あうぶらう盗賊の所為なるハ
獅子王の劔でさし衣籠る皮籠をどせも奪ひ行
べいといふあめめ取行らん主君の形代とえいめので
尋出さぞおくまきうとあひさつひなぐらまどとりふん

めしうもあうざれバせんるにのん鶴太のんがやくよ又ひとりの
めのおひとぞ添へる

國字物語四の巻終



